

【エッセイ】

フォーラム

2018-2019年度編集委員会のもと、新しい投稿カテゴリとして「フォーラム」が新設されました。

「フォーラム」では、会員間の知的交流の活性化をめざし、現地滞在者によるレポート、選挙や事件などの現状解説、一年間の総括、現在進行中の研究プロジェクトの紹介、国内外での学会やセミナーの紹介、資料の紹介、会誌に掲載された論文に対する意見やそれに対する著者のリアクション、研究者、実務家、記者、活動家など様々な会員が、気軽に発信・共有できる内容のエッセイを募集しています。

また、すべてのエッセイは、JAMS ホームページでも閲覧できます。

- シンガポール首相の施政方針演説にみる国民統治の技法（市岡卓）

シンガポール首相の施政方針演説にみる国民統治の技法

市岡 卓

「11月からは、公立の医療機関で働くムスリムの看護師で希望する方は、制服着用時にヒジャブ（注：原文ではマレー語の“tudung”）を着けることが認められます。」2021年8月29日、毎年恒例の施政方針演説で、シンガポールのリー・シェンロン首相はこう発表した。

この施政方針演説は“National Day Rally”（以下「NDR」という。）と呼ばれるもので、毎年1回、8月下旬に行われる。（8月9日の独立記念日のイベント“National Day Parade”とは別のものだ。）日本の国会での施政方針演説のように淡々と原稿を読み上げる無味乾燥なものではない。大きなスクリーンに次々と写真やイラストを映し出し、首相が時にはユーモアも交えながら分かりやすい言葉で国民に直接訴えかける政治イベントで、全編がテレビで生中継される。無名の一般国民が実名・顔出しで紹介されることも多い。2021年のNDRの冒頭では、コロナ禍の下で重要な役割を担った人々として、ワクチンを含む低温貨物を取り扱う空港内のフォークリフト運転士、シンガポールに一時留め置かれたマレーシア人労働者を支援した学生ボランティア、患者の治療に当たる理学療法士（三名とも女性）が写真で紹介された。このうち会場に招待された理学療法士の女性を首相が紹介し、出席者が拍手を送るシーンがあった。よく考えられた演出には毎年感心させられる。

2021年のNDRでは、①新型コロナウイルス感染症、②経済、③民族・宗教の三つのテーマが取り上げられた。民族・宗教の問題について、リー首相は、コロナ禍の下で人々のフラストレーションが高まり、ヘイト行為など人種差別的な事案が増えていると憂慮を示した。そして、国民に対し民族・宗教間融和への取組み、具体的には、互いに歩み寄り (compromise)、譲り合う (give and take) ことの大切さを改めて訴えた。また、シンガポールでは民族・宗教の異なる人々が平和的に共存しているが、それは人々の努力によりデリケートなバランスが維持されているものだと述べた。宗教と民族は極めてセンシティブな問題であり、何かを変更する (make any move) 前には時間をかけて相談し、みんなが納得するようにし、合意を図らなければならない、とリー首相は結論づけている。

続いて、リー首相はヒジャブの話を持ち出した。高校レベルまでの公立学校および公的部門で制服を着用する職種 (国軍、警察、国立病院の看護師など) では、制服に関する規則として、ムスリム女性のヒジャブの着用が禁止されてきた。2002年に、また、2013年9月から2014年1月にかけて、規制の見直しを求める声が高まった。政府は、「民族性・宗教性の過度な表出が抑制される公的空間 (public space) を確保することが必要」という理由で、規制を維持してきた。しかし、2021年4月、政府は国立病院の看護師に関する規制を見直す方針を明らかにし、最終的に同年8月のNDRでリー首相が見直しを正式に公表した。政府が見直しを行った背景については、ムスリムが宗教の観点から要望するだけでなく、非ムスリムの側からも反差別や人権といった観点から見直しを求める声が高まってきたことがあるともみられる。

NDRでリー首相は、まず、世界的な宗教意識の高まりによりシンガポールでもヒジャブを着けることを望むムスリム女性が増える中で、特に看護師についてはムスリム社会の中で規制見直しを求める声が高まってきたと述べた。しかし一方で、非ムスリムの国民が看護師のヒジャブ着用をどう感じるかを慎重に見極める必要があり、従って、ヒジャブは単にムスリムだけの問題ではなく、「国家的な問題」 (national issue) だと言う。民族間の関係が良好であり、非ムスリムにとってヒジャブは見慣れたものになり、ヒジャブ姿のムスリム女性は非ムスリムと問題なく社会的に交流していることなどを踏まえ、看護師のヒジャブ規制を見直すことにしたと、リー首相は説明した。

リー首相は、毎年英語のほか華語、マレー語でもNDRの演説を行っている。英語、華語、マレー語の演説はそれぞれ国民一般、華人社会、マレー系 (ムスリム) 社会に向けられたものであり、三つの演説はそれぞれ内容が異なる。英語の演説に先立って行われたマレー語の演説では、ヒジャブ規制の問題も取り上げたが、「これはマレー・ムスリム社会だけの問題ではなく、国家的な利害に関わる問題だ」という理由で、結論については「この後、英語の演説で公表する」と述べるにとどめた。これを受けて英語の演説で改めて規制見直しを表明したのだった。

リー首相は、2004年の就任以来、コロナ禍のため中止になった2020年を除き、17回にわたりNDRの演説を行っている。その中では、民族・宗教は依然としてセンシティブな問題であり、特に世界的な宗教意識の高まりの中で宗教が社会の分断線になりかねないと

指摘し、繰り返し民族・宗教間融和の重要性を訴えてきた。

リー首相によれば、シンガポールの民族・宗教間融和は何らかのきっかけで崩壊しかねない極めて脆弱なものであり、そうならないためには、みんながお互いに我慢しなければならないのである。ヒジャブの着用についても、他宗教に属する国民がどう思うかを気にかけなければならない。ムスリムの宗教実践の一つであるヒジャブの着用は、ムスリムだけの立場から自由に決められるものではない「国家的な問題」とみなされる。首相は「バランス」や「譲り合い (give and take)」の必要性を強調するが、国民が相互に話し合うことによってではなく、政府が一種の裁定を行うことによって「バランス」が取られることになる。

言語の使用や宗教的祭礼に関わることなど民族・宗教コミュニティからの要望は、政府が全体の「バランス」をみながら、その可否を判断する。コミュニティ間の調整も政府が水面下で行う。今回のヒジャブ規制の見直しに関して交わされたリー首相とイスラームの宗教上の最高指導者であるムフティとの公開書簡からは、NDRでの規制見直しの正式公表に先立ち、政府と「利害関係者との協議」が行われたことが分かる。「利害関係者との協議」とは、非公表だが、例えば、華人社会を代表する団体といわば擬制されるシンガポール中華総商会や宗郷会館連合総会と政府との協議といった形を取ったと考えられる。

このように、民族的・宗教的なアイデンティティの表出に関わる事柄は、政府が一元的に管理する。イスラームの宗教実践の一つに過ぎないヒジャブの着用も、「国家的な問題」とされ、政府の管理の対象となる。社会の分断というリスクが常にリマインドされることで、政府が国民の宗教実践に介入することが正当化される。こうして政府の管理の下で民族・宗教間融和が維持されることになる。

結局はパターンリスティックな国民の管理ということになるのだが、筆者の興味を引くのは、そのような統治手法について、政府がNDRを通じ国民に対し堂々とその正当性を主張することである。リー首相は、「華人を採用したいために華語が話せることを条件にする求人がある」、「華人以外にアパートを貸すことをいやがる大家もいる」と実際にある差別の話をし、「民族融和は道半ばで、実現には時間がかかるのです」と訴える。首相の語り口は平易で穏やかで、あえてタブーにも触れ、国民の実感に訴えるものだ。このような首相の説明に（一方的な説明ではあるが）、少なからぬ国民が納得感を持つだろうと想像される。

現在のシンガポール政治については、野党への様々な圧力、報道の自由の制限など、依然として権威主義的な統治が維持されていることが指摘される。それはそのとおりだとしても、NDRの首相の演説にみられるように、国民に対し政府の統治手法について丁寧に説明し、説明責任を果たそうとしていることもみてとれる。権威主義国家とされるシンガポールであるが、国民統治の技法として、ある面では国民の支持を取り付けるためのソフトなアプローチも取られていることは、もっと注目されてもよいと思う。

(いちおか・たかし 流通経済大学)

2021年10月31日 投稿受付